

関東大震災における賀川豊彦・ハル夫妻と村岡家

Kagawa Toyohiko, Kagawa Haru, and the Muraoka Family in the Great Kanto Earthquake

藤沢 真理子

Mariko Fujisawa

愛知東邦大学 人間健康学部

賀川豊彦の関東大震災復興支援は知られているが、妻ハルがどのように過ごしていたのかほとんど研究されていない。本稿では、関東大震災時のハルの状況と、ハルの親戚である村岡家と賀川豊彦・ハル夫妻の関係を分析した。1923年9月1日大正関東地震が起こり、ハルは兄弟のように仲のよかった村岡家の従弟妹たちを失う。夫の賀川豊彦は地震後すぐに神戸から東京へ向かい、その後本格的に復興支援を始める。ハルは神戸で赤ん坊の長男純基を背負い、イエス団の仲間とともに古着や蒲団を集める。復興支援と子育てで忙しい日々を送っていたハルは村岡家の人達を偲ぶ暇もなかったのであろうか。関東大震災から5年後、1928年12月29日ハルの日記に、村岡家の人達の夢を見て眠れなくなったことを記している。村岡家は福音印刷合資会社を経営していたが、1923年大正関東地震により全壊、焼失、倒産となった。1912年から1923年の短い期間であるが、豊彦・ハルの著作を伯父の村岡平吉が3冊、従兄の徹三が4冊（ハル著作2冊を含む）印刷しており、両者の関係が密接であったことが著作からも明らかとなった。

1. はじめに

1923年9月1日大正関東地震で大きな被害を受けた東京都や神奈川県は、賀川豊彦・ハル夫妻と縁が深い。豊彦は徳島中学校を卒業した後、東京の明治学院で2年間神学の勉強をした。妻ハルは、はる子、春子、ハル等の名前で著作しているが、本稿では「ハル」とする。ハルは神奈川県横須賀市の生まれで、親戚の村岡家の人々は東京や神奈川に住んでいた。ハルの父親芝房吉は度重なる火災により商売がうまくいかなくなり、姉の夫である村岡平吉が経営する福音印刷合資会社横浜本社に勤め始める。1904年神戸支店の設立とともに、ハルたち家族は神戸へ移る。やがて、ハルは福音印刷神戸工場の女工となり、そこで賀川豊彦と出会い、結婚し、夫とともにセツルメント活動に貢献する。1923年9月1日大正関東地震が起こり、ハルは兄弟のように仲のよかった村岡家の従弟妹たちを失う。夫の豊彦は地震後すぐに東京へ向かい、その後復興支援を本格的に始める。一方、ハルは神戸で赤ん坊の長男純基を背負い、イエス団の仲間とともに古着や蒲団を集めた。10月末には豊彦一家は復興支援のため東京へ引っ越しする。

夫の豊彦は関東大震災の復興支援活動が認められて国の委員会委員等となり、その活躍がよく知られているが、妻のハルは関東大震災時どのように過ごしたのかほとんど研究されていない。本稿では関東大震災時のハルの状況、そ

して豊彦・ハル夫妻と村岡家との関係を見ていきたい。

研究方法としては、賀川豊彦やハルの著作、日記、新聞記事などを分析する。とくにハルの親戚である村岡家が福音印刷合資会社を経営していたことから、豊彦・ハル夫妻と村岡家との関係を著作から研究することで明らかにしていきたい。

2. 賀川豊彦・ハル夫妻と村岡家の関係

ハルは神奈川県出身で、子どもの時から村岡家と親しかった。村岡家の中で最もよく知られている人物が村岡花子である。多くの児童小説、とくに『赤毛のアン』の翻訳が有名である。この村岡花子をモデルにしたNHK朝の連続ドラマ「花子とアン」が2014年3月31日から9月27日まで放送され、全156回の平均視聴率は22.6%で、過去10年で最高の視聴率となった¹⁾。このNHKドラマがきっかけとなり、2014年9月2日から10月31日まで神戸の賀川記念館において特別展「花子とハル」が開催された。「花子」とは村岡花子（1893～1968）のことであり、「ハル」とは賀川ハル（1888～1982）のことである。神戸新聞2014年7月7日には「同館によると、花子とハルに親交があったとの記録は確認できないが、1922（大正11）年に平吉の葬儀が横浜指路教会（横浜市）で営まれた際、司式を豊彦が務め、ハルも同行。同館は『教会で顔を合わせたのは确实』とみる」と書かれている²⁾。

ハルの父親である芝房吉と、村岡花子の夫である村岡徹三の母親はなは、弟と姉の関係であり、ハルは子どもの時から伯母の家へ行き、村岡一家と親しくしていた。賀川ハルと村岡花子の関係については、『東邦学誌』第47巻第1号（2018年）の論文「児童福祉に貢献した女性たち～賀川ハルと村岡花子～」で詳しく報告している³⁾。

本稿では、最初に、2018年論文で不明だった点を明らかにしておきたい。それは、1967年6月3日賀川ハルの日記に書かれていた内容である。「3 土 博人、梅子の結婚式、手伝人も頼んだが何かと忙がしい。天気で幸、天気続きで農家ハ雨乞、申訳ない。（中略）180名位の方々であつた。村岡、小川貞一（筆者注：母方の従弟）も祝はれた。」と書かれている⁴⁾。筆者は1967年6月3日に行われた豊彦・ハル夫妻の二女梅子の結婚式に参加した「村岡」は、村岡家の一番年下の従弟の村岡潔なのか、それとも村岡花子なのか疑問に思っていた。2020年2月15日、東京の松沢記念館において第1回賀川ハル研究会が開催されることとなった⁵⁾。筆者の論文を読んでもくれた賀川ハルの孫にあたる富澤康子氏より講演講師を依頼された。その時に、筆者は富澤氏にハルの二女梅子の結婚式の写真を持っておられるか問い合わせたところ、結婚式の写真を見せていただくことができた。その写真には、中央付近に賀川ハルと村岡花子が笑顔で一緒に写っていた。ハルの従兄で花子の夫である村岡徹三は、結婚式の4年前1963年2月6日に亡くなっていたが、徹三が亡くなった後も、賀川ハルと村岡花子の親交は続いていたことが写真から明らかとなった。

村岡家と豊彦・ハル夫妻をつなぐキーパーソンは、村岡平吉である。ハルの伯父であり、村岡花子の舅である。村岡平吉は福音印刷合資会社を創立し、横浜指路教会の長老を務めた。村岡花子の孫にあたる村岡恵理が著述した『アンのゆりかご』には、村岡平吉が亡くなり、「神戸から賀川豊彦、ハル夫妻が駆けつけ、横浜指路教会での葬儀は、賀川の司式で執り行われた」と書かれている⁶⁾。

村岡平吉は福音印刷合資会社を営んでいるので、出版物を分析することによって、豊彦・ハル夫妻と村岡家の関係が明らかになるのではと考え、調査した。

まず、ハルの著作についてである。ハル初めての著作『貧民窟物語』とハル2冊目の著作『女中奉公と女工生活』

の奥付には「印刷者 村岡徹三」⁷⁾とあり、従兄の村岡徹三が印刷したことが明らかとなった。福音印刷はもともと聖書を印刷するために設立された会社であり、聖書や福音関係の本が多く、ハルの2冊のようなものは少ない。ハルと徹三は従兄弟の中でも年齢が近く、またハルが福音印刷神戸工場の女工として働いていたこと等から、徹三がハルのために印刷したと考えられる。

次に、豊彦の著作である。分析方法としては、国立国会図書館デジタルコレクションの賀川豊彦著作125冊を分析した。その結果、福音印刷（横浜、東京、神戸）によって印刷された豊彦の著作は8冊であり、1912年から1923年までの期間に印刷されていた。なぜこの期間なのか、この時代の賀川豊彦とハル、そして村岡家の状況について見ておきたい。

1909年12月、賀川豊彦は神戸神学校の神学生であったが、結核を患い、医者から数年の命と告げられた。豊彦は、残り少ない命であれば、貧しい人たちのために尽くしたいと神戸の貧しい地域に住み込み、支援活動始める。1911年、豊彦は熱心なキリスト教徒である村岡平吉の方針で実施されていた福音印刷神戸工場の賛美歌指導、後に説教のために神戸工場へ行き、そこで女工をしていた芝ハルと出会う。そして、1913年ハルと結婚する。1914年から1917年まで、賀川豊彦はアメリカのプリンストン大学に留学することとなり、帰国してからは労働運動や消費者運動や農民運動など幅広く活躍する。妻のハルも豊彦の留学中、横浜の共立女子神学校で勉強し、神戸にもどってからは夫の豊彦とともに貧しい地域の人々のために力を尽くす。

1921年福音印刷を経営していたハルの伯父である村岡平吉は引退し、息子の徹三が社長に、弟の齊が常務となる。翌年1922年に村岡平吉は亡くなり、横浜の指路教会で葬儀が営まれ、豊彦が牧師として司式をし、ハルも長男純基を妊娠中で体調が悪かったが参列した。1923年9月1日大正関東地震が起こり、横浜の福音印刷工場は全壊し、ハルの従弟である齊は工員とともに亡くなった。また、ハルの従兄で村岡花子の夫である徹三が経営していた東京の福音印刷は地震の揺れには耐えたが、東京で起こった大規模火災により焼失した。その後、会社の役員に騙され、福音印刷は倒産した。このような賀川家と村岡家の時代背景の中で、福音印刷が印刷した賀川豊彦の書籍8冊である。

1912年、印刷されたものは1冊である。『友情』⁸⁾は福音印刷神戸工場の菅間徳次郎が印刷している。豊彦は前の年からこの福音印刷神戸工場へ最初は賛美歌指導、のちに説教のために毎週通っており、これがきっかけとなりハルと出会う。

1913年、印刷されたものは2冊である。『預言者エレミヤ』⁹⁾『基督伝論争史』¹⁰⁾は福音印刷神戸工場の菅間徳次郎によって印刷されている。この年に豊彦とハルは結婚しており、翌年1914（大正3）年5月8日ハルの日記に、福音印刷神戸工場の菅間徳次郎から伯父の村岡平吉が神戸へ来ることを教えてもらい、豊彦と二人で神戸元町へ会いに行ったことが書かれている¹¹⁾。

1915年、印刷されたものは2冊である。『日曜学校教授法』¹²⁾『貧民心理の研究』¹³⁾は村岡平吉によって、福音印刷東京と横浜で印刷されている。『日曜学校教授法』は賀川豊彦がチャレース・エー・オリバーを訳した書籍である。1914年から1917年まで、豊彦はアメリカのプリンストン大学に留学しているので日本を離れる前に原稿を渡していたか原稿を郵送したと考えられる。

1920年、印刷されたものは1冊である。ハルの伯父である村岡平吉が福音印刷横浜で『地殻を破って』¹⁴⁾を印刷している。この年、豊彦はベストセラーとなる『死線を越えて』を発表している¹⁵⁾。1920年にはハルの1冊目『貧民窟物語』が従兄の村岡徹三によって印刷されている。

1923年、豊彦の著作2冊、『イエスと自然の黙示』¹⁶⁾『イエスの日常生活』¹⁷⁾が村岡徹三によって印刷されている。同じ年、徹三はハルの2冊目『女中奉公と女工生活』も印刷している。前の年に、村岡平吉が引退し、徹三が社長に、そして弟の齊が常務となり、兄弟力を合わせて福音印刷を発展させようとして取り組んでいた。

しかし、1923年9月1日大正関東地震により福音印刷は全壊、焼失、倒産した。そのため、福音印刷で印刷された豊彦とハルの著作は1912年から1923年の短い期間であり、この期間に福音印刷で印刷されたハル2冊と豊彦8冊の著作のうち、村岡平吉によって3冊、徹三によって4冊（ハル著作2冊を含む）印刷されている。村岡家が印刷会社を営んでいたことから、豊彦・ハル夫妻の著作を分析することで、両者の関係が密接であったことが明らかとなった。

次に、村岡家の人々を見ていきたい。

3. 村岡家の人々

村岡徹三はハルの従兄であり、村岡花子の夫である。徹三は1887年に生まれ、1963年に亡くなっている。ハルより1歳年上になる。徹三は村岡平吉の三男であり、長男の十太が病弱であり、次男の俊次は他家に養子となったため、早くから福音印刷の後継者になることが決められていた。1919年花子と結婚し、1922年徹三は父の村岡平吉から福音印刷の取締役兼支配人の座を受け継ぐ。翌年1923年9月1日、大正関東地震が起これ、福音印刷横浜工場は全壊し、銀座本店は地震後の大火災で全焼し、さらに信頼していた役員に騙され福音印刷は倒産する。そのため、「村岡徹三」の名で印刷された本は父親の村岡平吉に比べて多くないが、その中の2冊が従妹のハルの著作、2冊が豊彦の著作であったことはすでに述べた通りである。

徹三の弟の齊は平吉の五男である。1922年父の平吉が引退し、兄の徹三が会社を受け継いだ時に、齊も常務取締役になった。齊は新しい印刷技術を学ぶために1909年ロンドンへ行く際、途中の神戸に寄港する。その時、神戸に住んでいたハルは齊を見送りに行っている。

ほかに、徹三の兄弟姉妹としては、四男の昇と六男の潔、そして長女のユキ子と二女のスミ子がいる。「長女ユキ子は神奈川県土佐野精一氏（指路教会信徒）に嫁し。次男俊二氏は松野春吉氏、次女スミ子は水上政五郎氏に、何れも養子となれり。」と『信仰三十年 基督者列傳』に記されている¹⁸⁾。

ハルの伯母である村岡はなは六男二女の母親であり、ハルの父親の芝房吉の姉である。房吉は度々の火事により商売がうまくいかなくなり、はなの夫の村岡平吉が経営する福音印刷合資会社横浜本社に勤め始める。伯母であるはなは亡くなる前までハルのことを気にかけて、夫の平吉にハルの結婚相手探しを頼んでいた。

村岡平吉は、1852年神奈川県小机村に生まれ、歐字新聞の職工から始め、上海で高い印刷技術を学び、福音印刷合資会社を創立した。熱心なキリスト教徒であり、横浜指路教会の長老であった平吉は日本だけでなく海外の聖書も印刷していた¹⁹⁾。

「平吉は一八九八（明治三一）年、聖書、讚美歌、聖公会の祈祷書、講壇用の大型聖書、トラクト等を印刷する合資会社を設立する。平吉が四六歳頃のことである。ハルと父親の房吉が勤務した神戸支店開設は一九〇四（明治三七）年であり、房吉は支店開設直後の一九〇四（明治三七）年五月から、そしてハルは同年一〇月から一九一三（大正二）年三月末まで勤務した。」²⁰⁾

伯父の平吉のおかげで写すことが出来たハル・豊彦夫妻の写真がある。1914（大正3）年5月8日金曜日に写され

たものである。ハルの日記には「村岡の伯父が来て居ることを管間氏にて聞て来たので二人で面会に吉野館へ行。すぐ会ふて呉れないので元町の市内で二人が写真を取った。一年前に結婚してうつすのは今が始めだ。二三軒本やを探つて再び吉野館へ行く。小一時間話して帰る。」とある²¹⁾。この写真は豊彦とハルの結婚式の写真と考えられていたが、結婚の翌年に写真館で撮影されたものであることがハルの日記から明らかとなった。

賀川ハル（旧姓：芝ハル）は1888（明治21）年3月16日神奈川県横須賀市で生まれ、子どもの時から伯母の村岡はなの世話になっていた。ハルは、『女中奉公と女工生活』の中で、「私が小學校に通はない以前から耶蘇教の本が横濱から送られてあつて、信仰を勧められたものだが文字が讀める様になつて私は時々開いて見たが、よみ憎い片假名、人の名前で面白くないのでそのまゝにしてゐた。十二歳の時夏休みに横濱の伯母の許に遊びに行くと、日曜日には皆なで會堂に出掛ける。兎に角く熱心な信者であつた。私はこの人達には世話になつて、そして伯母からより感化を受けた。夫に對して子供に對して、又その友達隣人に接して伯母はよい人であつた。豪（えら）い夫人であつた。私はいつも尊敬を拂つて居た。」と書いている²²⁾。

尋常高等小學校を卒業したハルは、家計が苦しく師範學校への進学をあきらめ、女中として働き始める。一年後、ハルが勉強したいことを知った伯父の村岡平吉は、自分の家にハルを引き取り、指路教會に併設していた女子住吉學校に通わせてくれた。伯母の妊娠・出産により、ハルが學校に通つた期間は短い。ハルは1914年10月19日の日記に「約束がしてあるので太田町（筆者注：村岡家の家がある）へ行く。雪さんが待つてゐた。二時過ぎから久保山へ行き久し振りで墓参りをする。墓下での故人伯母様には非常に世話になつた。又大に感化されし点もあると感謝してゐる」²³⁾と伯母への思いを記している。

1904年ハルの父親は福音印刷神戸工場に転勤となる。ハルも家族とともに、神戸に引っ越す。最初、父親や下宿人に弁当を届けていたが、家計を助けるために女工となることを決意する。

1909年、ハル21歳の時、伯母のはなが腎臓炎で亡くなる。ハルがロンドンに行く従弟の齊を神戸港で見送つた5～6日後である。亡くなる数日前から「怖ろしい苦痛があつて看護のものもその座に居堪らない程激烈なものであつたと聞かされて私は全く悲しかつた。（中略）基督教は神は愛だと教へ、神に心熱い伯母は何故あの病苦が有つたのだらう。神に頼らない基督教を嫌ふ人のうちにもあんなに迄病の苦しみを知らぬ他人もあるのに、愛の神だと云ふ神がどうして伯母にあの苦しみを與へたのであらうと、私は解らなかつた。私が信仰のない者だと知つて教會の人は慰めてもくれ、教を説いてもくれた。然し私はこの疑を抱いて強い反感を以て説く人を退けた。」²⁴⁾とハルは書いている。

1911年、豊彦が牧師とともに神戸の福音印刷工場へ来る。福音印刷では毎週月曜日に説教と讚美歌の時間があつた。ハルは豊彦の印象について『私は新川に住む乞食の親分であります』と蒲柳な質の持主とも思はれない大聲を出した。それでその言葉と、その聲の大きいのに皆吃驚して仕舞つた。」と記している²⁵⁾。やがて、豊彦は印刷工場で讚美歌だけでなく説教も行うようになった。豊彦の説教にハルは魅せられていく。

ハルは、キリスト教に対して「伯母の病苦以来、基督教と云ふ神が解らなかつた。愛の神が不可解だつたところが牧師の説かれるところに依ると、神は愛だから試練がある。人にはそれが或場合非常な苦痛である。而しそれを以て神の愛を否定してはならない。愛する人類をより立派なものにするために鍛へられることそれが神の愛である。と説かれた。折から隣の鐵工場で高く槌の音が聞える。説教者は言葉を續け『あの鐵にしてもそのまゝならばたゞの鐵であるけれども、火に入れ水に浸し打ち擲（たた）く後に立派な鋼鐵になるのである』と。丁度私の疑惑をすつかり知つて私に説かれた心持がした。そして私は恥ぢた。知りもしないのに神の愛を否定したり生意氣な考を持つてゐたと

悔いた。私は喜こんだ。私の心に光がさして来た。」²⁶⁾と書いている。

1913年5月27日、ハルは25歳で豊彦と結婚する。結婚式が終わると、ハルと豊彦は新川に戻り、貧しい人たちや病人の世話をした。1914年豊彦はアメリカのプリンストン大学へ留学する。この時期、ハルも横浜の共立女子神学校で神学を勉強することとなる。神学校に入る前に村岡家で泊まっており、また毎週月曜日、神学校が休みの時は村岡家に行っていた。ハルは1913年から1923年まで、横浜の共立女子神学女学校へ通っていた時期を除き、神戸の新川で人々のために働いた。

次に、1923年の大正関東地震とその被害について見ていきたい。

4. 大正関東地震とその被害

1923年9月1日11時58分、大正関東地震が起こる。大正関東地震は、北米プレートにフィリピン海プレートが潜り込む相模トラフで発生したマグニチュード7.9の巨大地震である。震源域が神奈川西部から房総半島南部にわたるため、神奈川県や千葉県南部で強い揺れになった。震源域からやや離れているが、東京の沖積低地も強く揺れた。死者・行方不明者は、東京や横浜を中心に105,385人とされる²⁷⁾。

大正関東地震の揺れについて、東京帝国大学の物理学者であった寺田寅彦は上野で被災し、「震災日記より」に次のように書いている。「それにしても妙に短週期の振動だと思つて居るうちにいよいよ本當の主要動が急激に襲つて来た。同時に、これは自分の全く経験のない異常の大地震であると知つた。其瞬間に子供の時から何度となく母上に聞かされてゐた土佐の安政地震の話がありあり想出され、丁度船に乗つたやうに、ゆたり―揺れると云ふ形容が適切である事を感じた。仰向いて會場の建築の揺れ工合を注意して見ると四五秒程と思はれる長い週期でみし―みし―と音を立てながら緩やかに揺れて居た。(中略) 主要動が始まつてびつくりしてから數秒後に一時振動が衰へ、此分では大した事もないと思ふ頃にもう一度急激な、最初にも増した烈しい波が来て、二度目にびつくりさせられたが、それからは次第に減衰して長週期の波ばかりになつた。」²⁸⁾

作家の幸田文は自伝的小説『きもの』の中で、関東大地震が起こった時の様子を次のように描いている。「冷えた麦湯と海苔結びの食事は、あと片付けもいらぬ寛ぎがある。おばあさんが本甲州の葡萄でもたべようか、ひと走り八百屋へね、という。お金を受取ろう渡そうとしたとき、キシキシと天井のあたりに音がしたと思つたとたん、激しい揺れと家鳴りだった。るつ子はおばあさんにしがみつきながら、棚からものがばらばらと落ち、襖が斜に裂け、掛硯がずり動くのを見た。台所で鍋がひどい音をたてたのもきいた。すべて夢の中のように、しかも割にはっきり見聞きした。そこいらじゅうが埃くさい空気になつた。」²⁹⁾

武村雅之は幸田文が被災した場所について、東京の向島、寺島村寺島1716番地の蝸牛庵とする³⁰⁾。また、幸田文は「大震災の周辺にいて」の中で「はじめにお断りしておくけれど、私は関東震災にあつてはいるのだが、市内（筆者注：当時は東京市）にいた人たちのような凄まじい体験はしていないのである。市外（筆者注：寺島村で被災）に住んでいたからで、隅田川の東、墨田堤からだらだらとおりて一丁（約100m）ほどのところ、農家にしもたやと商店と工場がまざる、市の周辺村だった。地盤がいいとは思えない土地だし、家並みも立派には遠いものだったから、どの家でも被害のない家はなかったが、それでもバツタバツタの将棋倒しというわけでもなく、火事も近くまで燃えてきたが焼けとどまってくれたし、怪我人は何人かあつたようだが、圧死など悲惨な死は近所のかぎりではきかなかつた。

私の家も破損程度ですんだし、家族三人怪我もせず、飢え餓えもせず、まずは関東震災にあった者の中で、いちばん難の軽かったものと思う。だから私の震災経験は、焼け残りのであり市周辺村型である。」と書いている³¹⁾。

これらの文章からは幸田文が住んでいた場所は震度7のような激震に襲われたわけではなく、震度6弱程度の揺れだったと思われる。名古屋大学の地震研究者である武村雅之は「寺島町の被害は、焼失はなく、住家の全潰350戸、全潰率7.7%で、揺れの強さは震度6弱と推定」と書いている³²⁾。

しかし、この場所からほんの数メートルの本所区向島須崎町まで、火災は押し寄せていた。9月1日午後6時ごろ、風向が南から西へさらに北へと変化した。向島に住む人は「小梅町から吾妻橋方面に逃げていれば、川縁に火が到達するのが早く、そのぶん水に浸かっている南風による火の威力で焼死か溺死かの憂き目に遭っていた可能性が高い。」と武村雅之は書いている³³⁾。大正関東地震直後に撮影された映像の多くには、隅田川に多くの焼死もしくは溺死の死体が浮かんでいる様子が映し出されている。

関東大震災の死者・行方不明者は、東京府70,387人、神奈川県32,838人、千葉県1,346人、静岡県444人、埼玉県343人、山梨県22人、茨城県5人、合計105,385人と報告されている³⁴⁾。

火災による死者・行方不明者の数について、北原糸子は、「九万一千七百人であるという点である。この震災では圧倒的多数の死者は火災によって発生したことがわかる。さらに、東京府の火災による死者は六万六千五百二人、東京市の火災による死者は六万五千九百二人であるから、東京の郡部の火災による死者は六千九百人であり、圧倒的多数は東京市の焼死者ということになる。このうち、被服廠での死者が三万八千〇〇〇人とされるから、東京市の焼死者の六〇パーセント近くが震災記念堂の元地である被服廠跡で死亡したということになる」と分析している³⁵⁾。

住家全潰による死者・行方不明者の数は、神奈川県が最も多く5,795人、次いで東京府3,546人、千葉県1,255人、埼玉県315人、静岡県150人、山梨県20人、茨城県5人、合計11,086人である³⁶⁾。震源域である神奈川県において、激震により倒壊した住家の下敷きとなり亡くなった人が多い。

また、流出・埋没による死者・行方不明者は、神奈川県836人、静岡県171人である³⁷⁾。大正関東地震はプレート境界型地震であるから津波が発生しており、神奈川県の相模湾沿いや静岡県の伊東や熱海などで起こった津波による死者が目立つ。また、流出・埋没では神奈川県根府川駅周辺で起こった山津波等の被害者も含まれている。

工場等の被害による死者・行方不明者は、神奈川県が最も多く1,006人、次いで東京府314人、静岡県123人、千葉県32人、埼玉県28人、山梨県2人である³⁸⁾。工場の倒壊などによって、神奈川県は「京浜工場地帯が形成されつつあった時期に当たり、保土谷町の富士瓦斯紡績工場453人、川崎町の富士瓦斯紡績工場154人、平塚町の相模紡績工場153人などの死者が出た。こうした工場では、床面積を大きく取った工場で昼夜交代で働いていた地方出の女工たちが多く被害に遭った。」³⁹⁾と報告している。

次に、大正関東地震が起こった時の豊彦とハルの様子を見ていきたい。

5. 大正関東地震後の賀川豊彦と妻ハル

地震の翌日、9月2日朝、神戸にいた賀川豊彦とハルは、朝刊で大正関東地震を知る。当時テレビもラジオもなかったため、豊彦はすぐに神戸の関係者と集まり、東京へ行くことを決め、その日の16時発の山城丸に乗る。

豊彦が神戸を離れた翌日、9月3日のハルの様子について、豊彦と関東大震災支援にあたった深田種嗣が次のよう

に書いている。「賀川春子夫人は早朝よりイエス団に来られ、災害地に送るべき衣類を整理してられる。皆で山手方面へ出かけ、衣類を恵まれるよう軒別に頼んで歩く。宏壮な邸宅に住む人達の冷淡さ、時に寺田君ら熱心党の反感をそそる。」⁴⁰⁾

また、震災から9年後にハルが書いた「現代社会に於ける無産婦人の使命」には、ハル自身が当時の様子を次のように振り返っている。「かつて関東大震災の当時、私は二歳の長男を背負ふて、東京の罹災者に送るべき蒲団を神戸の市中を貰つて歩いた。北に山を背ひ南に海を抱くこの街は、自然に斜面をした地形であるが山手は有産階級、中程は中産階級サラリーマン、下には神戸の貧民部落が有ると云つたやうな有様だ。荷車を引いて中程まで登つて行く時、試みに這入つて震災に就いて蒲団の寄附を乞ふと、夫人が直ちにそれに應じて與へられる。處に依ると二枚三枚と出されるので、こんなに貰つて差支へはあるまいかと懸念される場合があつた。この調子なら、山手の有産階級からは、定めて多くの寄附があらうと、心中大いに勇氣付けられて、車を引き上げて行く。壮大な構へに驚きながら往つて案内を乞へば、取次が出て来る。來意を告げると、先づ言上とばかり起つて（たつて）行く。我々の住宅とは違つて長い廊下を傳つて、たぶん幾間を隔つたところの夫人に、漸く傳へられるのであらう、程經て聞く言葉は、今日は差し上げられぬから、次の日に來て呉れと云ふ返事。意外にも豫想は外れた譯である。」⁴¹⁾

神戸の街はハルが書いているように、現在でも一番山手側に高級住宅、広大なお屋敷が建ち並んでいる。ハルは斜面中腹に住む中流階級の人達が関東大震災で困っている人たちを思い、蒲団を2枚3枚と寄付してくれたので、山手の金持ちの人達はどれだけ多くの蒲団を寄付してくれるだろうかと期待していたが、予想は全く外れ、冷たい反応だった。

1923年11月21日の神戸新聞には、「神戸新川のイエス団から木立、深田、田井、薄田の團員と共に上京し極力働いてゐる賀川豊彦氏はその後引続き本所松倉町横川小学校前のバラックに寝起きし、其處でキリスト教産業青年會の人々と共にこの寒空にふるへてゐる人々のために着物夜具等の防寒着の用意をはじめ、無料宿泊職業紹介、託児、法律相談、編物講習その他幼児や病人達のためには牛乳配達などまでして努める一方神戸ではこれに呼応して春子夫人が覚醒婦人會の濱田きよ子竹内ゆきゑ本田うた子その他イエス団の夫人達と共にこれ等東京罹災民に送る蒲団その他を一生懸命車で集め廻つてゐるが當の賀川氏は語る『現在本所の自分達のバラックには十四家族の気の毒な人々を収容していますが目下は一燈園の人達とも協力して市が浅草に造る無料宿泊所の仕事を手傳つてゐます』」⁴²⁾と掲載されており、ハルが覚醒婦人會の仲間とともに布団集めをしている様子が紹介されている。

一方、夫の豊彦は、9月2日夕方に神戸を出て、翌9月3日横浜港に到着したが着岸できず、その晩船に泊まった。次の日、9月4日、豊彦は横浜に入った。最初、徒歩で、その後品川行の列車に乗った。それから芝白金の明治学院へ歩き、友人の中山昌樹の家に泊まった。

9月5日、豊彦はまだ火災がくすぶっている中、東京市臨時震害救済事務を訪問した。当局者は「米は十分だが金その他の物資が不足して居る。殊に秋に向つてゐるので古着などが大に欲しい」という⁴³⁾。豊彦は「上野の高台に立つて 浅草 本所 深川の方面を見ると それは誠に怖ろしい光景であつた。焼かれた屍が三々五々 そこらあたりに散らかつてゐる浅草から吉原あたりまでは焦土の平原に化してゐる。」と記している⁴⁴⁾。豊彦は神戸の人に一刻も早くこの状況を知らせたいと思つたが、列車が込み合つて乗ることができず、その夜も明治学院で泊まった。

9月6日、豊彦は品川まで歩き、品川から東神奈川まで列車に乗り、その後静岡清水行の船に乗り、清水港に到着したのは9月7日朝だった。その日神戸まで列車でもどつた。

豊彦は神戸に帰ってから2日間、眠ることができなかった。「『あゝ Mも死んだ。Sも死んだ。誰れもやられた』さう思ふだけでも悲惨なのに 私はそれが幾十万人であることを思ふと ちつとして居られない。」⁴⁵⁾

豊彦は妻の親戚である村岡家のことについて『地球を墳墓として』の中に次のように記している。「私は横濱に多くの知己を持ってゐた。私の妻の従弟は山下町にある相當に大きな印刷會社の社長であり 私と妻の結婚を媒酌してくれた人はその支配人であった。それで餘程それらの人々の運命を尋ねたかったが 私は自分の血縁知己の人々を尋ねる爲めに來たのではなく 全く東と西とのキリスト教の救援團體の連絡を取りに來たのだから 一刻も早く その連絡を取ることに努めなくてはならぬと思つたので 私事を顧ることを全く抛擲した。そしてまた郵船會社の三島丸へのランチの出る横濱ドック会社の波止場に來た。後で知つたことであつたが 妻の従弟の印刷工場では約四百名の職工（その中の多くは製本女工）の内 逃れ得たものは僅かに八名位で 社長 支配人其外凡ての職工は煉瓦の下に埋れて死んで了つたと云ふことであつた。」⁴⁶⁾

神戸にもどつた豊彦は資金集めのために、九州や四国などで講演会を開き、1か月で7,500円を集め、10月5日に神戸へもどる⁴⁷⁾。

10月7日東京へ向かい、内務省や東京府や東京市を訪問し、近づく冬に備えるために蒲団が必要とわかつた。10月14日神戸にもどり、翌日大阪朝日新聞後援の全関西婦人聯合大会参加者に蒲団の寄付を訴えた。豊彦は自分の洋書を売り500円を手に入れ、また兵庫県知事に頼みイエス団基金から5,000円を引き出した。

10月16日、豊彦とイエス団の若者たちは物資を積み込み船で東京へ向かつた。豊彦は本所や深川の周辺を調査し、10月19日に彼の支援拠点の本所松倉町にすることを決めた。アメリカ赤十字からもらったテントを建て始めた。

豊彦は神戸でやってきた方法と同じように、被災者と共に生活することで、被災者の抱えている痛みを理解することができると考えた。賀川は被災者の良き隣人として本所松倉町でセツルメント活動を始めた。

本所基督教産業青年會は、被災者が経済的に精神的に自立できるように、職業紹介、法律相談、託児、消費者組合、信仰など幅広い支援を行った。1923年12月26日の神戸新聞に「賀川豊彦さんは今度四十坪ほどの建物一棟を若い大工さんから建て貰つて無料診療所を始めた、主任は賀川さんの親友馬島ドクトルで若く美しい妹の久子さんや晃子さんと一緒に多くの患者を世話してゐる。此の家は大工の田中源太郎（二五）君がたゞで建てたと云ふので氏は『源太郎館』と命名してゐる、そのいはれを聞くに何んでも賀川さんが京都で二回ほど演説したのを、聞いた田中君は非常に感奮した、そして間もなく此度の震災で大橋組の大工であつた君は同僚二百五十人と共に選ばれて東京に來り働いてゐるが一目上野の山から一面の焼け野を見て『東京は今金儲けをする所ではない』と思ひ急いで山を下り賀川さんの懷中に飛び込んで來たのださうだ、そして働いて得た金を全部賀川さんの前に『どうぞ御用の足しにでも！』と提供して毎日『嬉しい〜』といつては木を削り数日ならずして診療所を建てしまつたのだと」と書かれている⁴⁸⁾。この大工の田中源太郎のような若者が全国から集まり、賀川の活動を支援した。

1924年、豊彦は日本でまだボランティアという言葉のないときに、ボランティア活動を展開し、「此夏はまた大勢のボランチャーが助けて下さるそうですから、調査に、救済に賑やかに働けること今から楽しみにして居ります」⁴⁹⁾と書いている。豊彦は、日本のボランティアの先駆者と言われている。

6. 賀川ハルと関東大震災

関東大震災から5年後、1928年12月29日（土）ハルは日記に「昨夜ハ雨も少し降り夜半から風がひどい。死んだ水上や村岡一家の夢を見たので目を醒ましてからあの震災の当時を追憶した。建物の下敷などになつて肉体の苦痛もそうであろうが、その場合の精神的苦痛ハ、母ハ子に、子は親に思ひを寄せ、世の終りとも思へる。その出来事に処して、たとへ堪い苦痛を味ふだろう。何にも考へる暇なく命の終りが有ればまだしも、意識が明かで救ひ出される望もなくなつた時の気持を考へれば、その災害をまぬかれた自分など、少し位の困難や苦痛がよしあつたとしても何のこともなく切り抜け得る筈であると今朝つく（へ）思ふた。」と書いている⁵⁰。

ハルは子どもの時から村岡家へ遊びに行き、村岡家の子どもたちと親しかった。また、女中奉公の後、伯父の平吉が自分の家に呼んでくれ、短い期間であったが、女子住吉学校に通わせてくれた。1904年家族とともに移った神戸では、伯父が経営する福音印刷神戸工場の女工となる。また、1914年豊彦がアメリカ留学した時、ハルは横浜の共立女子神学校に入学するが、入学前に村岡家で泊まり、また、学校が休みの月曜日には村岡家へ行っていた。ハルの1914年10月19日（月）日記にも、村岡家に行き、長女のユキ子と一緒に伯母はなの墓参りに行ったことが先に述べた通り²³記されている。二女のスミ子は水上政五郎の養女になっており、大正関東地震によって水上家は全員亡くなった。また、ロンドンに行く時、神戸港へハルが見送りに行った従弟の齊も地震によって工場が倒壊し、工員とともに亡くなった。

ハルは震災から5年たった1928年12月の夜、地震で亡くなった村岡家や水上家の人々の夢を見て、建物の下敷きになってどんなに苦しかったであろうかと思うと眠ることができなくなった。地震の後、ハルは募金やふとん集め等に明け暮れ、そして10月末には拠点を神戸から東京へ、その3年後1926年10月には東京から兵庫県瓦木村（西宮市）へ移るなど、村岡家の人々を偲ぶ暇もないほど忙しい日々を過ごしていたのであろう。震災から5年、考えると眠れなくなるほど村岡家の人々を亡くしたハルの心の傷は大きかったのかもしれない。

まとめ

賀川豊彦の関東大震災復興支援はよく知られているが、妻ハルが関東大震災でどのように過ごしたのかほとんど研究されていない。ハルは関東大震災の前年、長男の純基を出産しており、活発に動ける状態になかった。ハルは神奈川県横須賀市の生まれで、親戚の多くは神奈川や東京に住んでいた。とくに、村岡家とは子どもの時から関係が深かった。ハルの父親は度重なる火災により商売がうまくいかなくなり、義兄の村岡平吉が経営する福音印刷合資会社横浜本社に勤める。1904年神戸支店の設立とともに、ハルたち家族も神戸へ移る。やがて、ハルは福音印刷神戸工場の女工となり、そこで賀川豊彦と出会い、結婚し、夫とともにセツルメント活動に関わる。1923年9月1日大正関東地震が起これ、ハルは兄弟のように仲のよかった村岡家の従弟妹たちを失うことになる。夫の賀川豊彦は地震後すぐに東京へ向かい、その後復興支援活動を始める。ハルは神戸で赤ん坊の長男純基を背負い、イエス団の仲間とともに古着や蒲団を集める。10月末には豊彦一家は復興支援のために東京へ引っ越しする。このように忙しい日々を送っていたハルは村岡家の人達を偲ぶ暇もなかったのであろうか。関東大震災から5年後、1928年12月29日のハルの日記に、村岡家の人達の夢を見て眠れなくなったことを記している。

本稿ではハルが関東大震災の時にどのように過ごしたのか、そして、豊彦・ハル夫妻と村岡家との関係を福音印刷（横浜、東京、神戸）が印刷した著作から分析した。1923年関東大震災によって福音印刷が全壊、焼失、倒産したために、1912年から1923年の短い期間であるが、福音印刷が印刷した豊彦8冊とハル2冊の著作のうち、伯父の村岡平吉が3冊、従兄の徹三が4冊（ハル著作2冊を含む）を印刷している。著作分析を通して、豊彦・ハル夫妻と村岡家の密接な関係が明らかとなった。豊彦とハル夫妻は結びつきの強かった村岡家のことが気になりながらも、それ以上に焼け野原となった東京の被災者のために全力を尽くした。今後、さらに賀川豊彦の関東大震災復興支援について研究を進めていきたい。

賀川ハル研究会第1回勉強会が2020年2月15日東京の松沢資料館で行われた。日本女性外科医会(JAWS)第24回勉強会も同時開催された。筆者は「賀川ハルと関東大震災」という題で報告し、本稿をまとめるきっかけとなったことに感謝したい。

【引用文献】

- 1) Darama & Movie by Oricon news (<https://www.oricon.co.jp/news/2042684/full/>) 2020年2月26日検索.
- 2) 『神戸新聞』2014年7月7日付.
- 3) 藤沢真理子「児童福祉に貢献した女性たち～賀川ハルと村岡花子～」『東邦学誌』第47巻第1号, 2018年, 1～17頁.
- 4) 賀川ハル「1967年6月3日日記」三原容子編『賀川ハル史料集第3巻』緑蔭書房, 2009年, 99頁.
- 5) 日本女性外科医会 (JAWS) 第24回勉強会 & 賀川ハル研究会第1回勉強会 (http://jaws.umin.jp/pdf/24thJAWS_meeting20200215Rev.pdf) 2020年8月21日検索.
- 6) 村岡恵理『アンのゆりかご』新潮社, 2011年, 194頁.
- 7) ハル著作の1冊目が(賀川はる子『貧民窟物語』福永書店、大正9年)であり、2冊目の著作が(賀川はる子『女中奉公と女工生活』福永書店、大正12年)である。
- 8) 賀川豊彦『友情』福音舎書店, 1912年.
- 9) 賀川豊彦『預言者エレミヤ』福音舎書店, 1913年.
- 10) 賀川豊彦『基督伝論争史』福音舎書店, 1913年.
- 11) 三原容子編『賀川ハル史料集』第1巻, 緑蔭書房, 2009年, 165頁.
- 12) 賀川豊彦『日曜学校教授法』日本基督教興文協会, 1915年.
- 13) 賀川豊彦『貧民心理の研究』警醒社書店, 1915年.
- 14) 賀川豊彦『地殻を破って』福永書店, 1920年.
- 15) 賀川豊彦『死線を越えて』改造社, 大正9年.
- 16) 賀川豊彦『イエスと自然の黙示』警醒社書店, 1923年.
- 17) 賀川豊彦『イエスの日常生活』警醒社書店, 1923年.
- 18) 警醒社編纂『信仰三十年 基督者列傳』警醒社書店, 大正十年, 147頁.
- 19) 森田忠吉編『開港五十年記念横浜成功名誉鑑(下)』横濱商況新報社, 明治43年, 700～701頁.
- 20) 岩田三枝子『評伝賀川ハル～賀川豊彦とともに、人々とともに～』不二出版, 2018年, 101頁.
- 21) 三原容子編, 前掲書, 165頁.
- 22) 賀川はる子『女中奉公と女工生活』福永書店, 大正12年, 119～120頁.
- 23) 三原容子編, 前掲書, 190頁.

- 24) 賀川はる子, 前掲書, 大正12年, 120~122頁.
- 25) 賀川はる子, 前掲書, 大正12年, 137頁.
- 26) 賀川はる子, 前掲書, 大正12年, 141~142頁.
- 27) 関東大震災による住家全潰率と震度の分布: 歴史地震研究会編『地図にみる関東大震災~関東大震災の真実』日本地図センター, 平成25年, 10頁.
- 28) 寺田寅彦「震災日記より」『寺田寅彦全集 文学篇 第5巻』岩波書店, 1950年, 544~545頁.
- 29) 幸田文『きもの』新潮社, 平成8年, 300頁.
- 30) 武村雅之『減災と復興~明治村が語る関東大震災』風媒社, 2018年, 171頁.
- 31) 幸田文「大震災の周辺にいて」『幸田文全集 18』岩波書店, 1994年.
- 32) 武村雅之, 前掲書, 173頁.
- 33) 武村雅之, 前掲書, 174頁.
- 34) 中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会『1923関東大震災報告書~第1編~』中央防災会議, 平成18年7月, 2頁.
- 35) 北原糸子『日本震災史』ちくま書房, 2016年, 286頁.
- 36) 中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会, 前掲書, 2頁.
- 37) 中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会, 前掲書, 2頁.
- 38) 中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会, 前掲書, 2頁.
- 39) 北原糸子, 前掲書, 287頁.
- 40) 深田種嗣「私の新川生活(五)」『火の柱』第157号, 昭和33年11月5日, 7頁.
- 41) 賀川春子「現代社会に於ける無産婦人の使命」三原容子編『賀川ハル史料集』第2巻, 緑蔭書房, 2009年, 127頁.
- 42) 『神戸新聞』1923年11月21日付.
- 43) 賀川豊彦『地球を墳墓として』アテネ書院, 1924年, 82~83頁.
- 44) 賀川豊彦, 前掲書, 1924年, 86頁.
- 45) 賀川豊彦, 前掲書, 1924年, 92頁.
- 46) 賀川豊彦, 前掲書, 1924年, 89~90頁.
- 47) 賀川豊彦, 前掲書, 1924年, 94頁.
- 48) 『神戸新聞』1923年12月26日付.
- 49) トヨヒコ「松倉町のバラックより」『雲の柱』第3巻第6号、大正13年、894頁。また、日本のボランティア研究者阿部志郎は賀川豊彦献身100年記念事業実行委員会編『Think Kagawa ともに生きる』家の光協会(発売)、2010年、13頁の中で「賀川は、適切な対応をし、まだボランティアという言葉のないときに、ボランティア活動を展開」と述べている。
- 50) 賀川ハル「1928年日記」三原容子編『賀川ハル史料集』第2巻, 緑蔭書房, 2009年, 89頁.